

最終試験結果の要旨	
学位申請者 氏名	浅見 祐弥
審査委員	主査 琉球大学 教授 嬉野 健次
	副査 琉球大学 教授 モハメド アムザド ホサイン
	副査 佐賀大学 教授 鈴木 章弘
	副査 鹿児島大学 教授 山本 雅史
	副査 佐賀大学 教授 一色 司郎
審査協力者	琉球大学 理事 井上 章二
実施年月日	令和 3年 7月 30日
試験方法 (該当のものを○で囲むこと。) <input checked="" type="radio"/> 口答 <input type="radio"/> 筆答	
<p>主査および副査は、令和3年7月30日の公開審査会において、学位申請者に対して、学位論文の内容について説明を求め、関連事項について試問を行った。具体的には別紙のような質疑応答がなされ、いずれも満足できる回答を得ることができた。</p> <p>以上の結果から、審査委員会は申請者が博士（農学）の学位を受けるに必要な十分な学力ならびに識見を有すると認めた。</p>	

学位申請者 氏名	浅見 祐弥
質問	今回の試験では、窒素施肥のみ検討しているが、窒素濃度とリン酸、カリなどの成分の割合も、植物の生長に関係しているのではないか。
回答	キクについては、切り花栽培でリン酸施肥に関する研究は多くあるが、窒素施肥に関する研究は、比較的少ない。そのため、今回は、窒素施肥に関して検討した。
質問	窒素を葉面散布により施肥する際、生長点が枯れることがあるが、そういうことはなかったのか。
回答	予備実験により、8mMより高い濃度で窒素葉面散布を行った場合、葉焼けが生ずることを確認している。よって、本研究では、8mMの濃度で葉面散布を行った。
質問	野菊に関しては挿し木苗5個体で試験しているが、挿し木苗ごとに苗の生育がかなりばらつくことはないのか。
回答	母株からの採穂の段階で、3節目から10節目の間と採穂する部位を統一しており、その中から2節ごとに採穂している。また、多くの挿し木苗を作成しており、その中から生育のそろったものを5個体選別し、試験に利用している。
質問	野菊におけるluteolin含量について、季節の違いによる含量の変化があると思うが、その点についてはどのように考えているのか。
回答	収穫対象物が花で、収穫時期が12月～3月と決まっているので、季節による影響は少ないと考える。
質問	キクカ、サイコとも菌根菌が共生することも考えられるが、菌根菌が共生すると植物内の成分含量にも影響する。この点について、菌根菌の共生を観察していないか。
回答	地下部については、根長等しか確認していない。今後、確認していきたい。

質問 今回、キクカのフラボノイド成分含量を調べられているが、この成分は花のどの部分に多いのか。

回答 花卉内に多いとされている。

質問 今回の結果で、キクカのなかで野菊が一番いい結果となっている。野菊は野生種なので、遺伝的な変異も大きいと考えられるが、今回の結果を他の野菊系統にも同様に活用できるのかについて、疑問がある。

回答 野菊は野生種なので、確かに、採取地（系統）の違いにより、結果に差が出ることも考えられる。よって、論文中に採取地などを記述するようにする。また、栽培を行う上では、優れた系統を選抜し、その栄養繁殖個体群を用いた方が良く考える。

質問 野菊の乾燥法について、成分含量の点から50℃処理が最も良いとされているが、50℃処理ではかなりばらつきがみられている。もう少しサンプル数を増やした方が良く思うが、その点についてどう考えるのか。

回答 サンプル数を増やせばばらつきは少なくなると思われる。今後、検討する。

質問 今回、標高の低い台湾南部で栽培するキクとして野菊をあげられているが、同じ台湾でも標高の高い地域で栽培する場合は、他の種を用いた方が良くないか。

回答 その通りだと思う。標高の高い地域での栽培については、今後検討する。

質問 野菊は12月下旬に開花するが、生薬原料として花を利用する場合、開花期の異なる他の種と組み合わせた作型も有効と考えられるが、その点についてどう考えているか。

回答 他の種を組み合わせた栽培体系を検討していきたい。